
恋する少年と2人の居候。

柴わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する少年と2人の居候。

【Nコード】

N0549L

【作者名】

柴わんこ

【あらすじ】

ここにとある恋する少年がいた。

そして少年の下には2人の居候がいる。

1人はその恋を応援するのだがもう一人はそれを好ましく思っていない。

そんな少年と居候の応援したりアピールしたりするのラブコメの始まりです！

ようやく2000PVです。応援よろしく願います。

1 話（前書き）

なんかすいません…この日の昼、コレを間違えて短編と投稿してしまいました

1話

とあるマンションの一室にて作戦会議が行われていた

「上手くいくかな」

と少々不安気味の彼が神谷健一^{かみやけんいち}こと彼女を作ろうと頑張る男子。

「大丈夫だって、だってあたしの作戦なんだよ？」

自信満々にそういう彼女は天原香織^{あまはらかおり}こと応援する居候。

そしてその後ろで、うー…とうなだれているのが天原希^{あまはらのぞみ}。

彼女は作戦会議には参加しない、健一の事が好きだからだ

じゃあ邪魔しに入るのか？と言うとそうではない。むしろ邪魔すれば彼に嫌われてしまうからだ。なので彼女は何もしない事にしている

神谷健一、彼はお金持ちの家に生まれた少年である。

しかし、いまとなつては父の仕送りだけで生活する。

そして彼の元には2人の居候がいる

2人は双子の姉妹であり、香織が姉で希が妹だ。

3人とも高校生活を送っている。

そして健一は恋の真っ最中にあつた。

昼休み、それは健一にとってチャンス^{おがわかなえ}の時間であつた。

彼が狙っているのは小川香苗^{おがわかなえ}と言う少し小柄な女の子だつた

そして今彼女が教室を出た

「いけー健ちゃん」

そう香織が言う^{おがわかなえ}と健一は教室を飛び出した。

そして希は上手くいきませんようにと手を合わせた

健一はすぐに声をかけた。

「かつ香苗さん」

緊張のせいか声が裏返っていた。

「声が裏返ってるよ〜？」

香苗はそんな健一にくすつと笑った。

「どうしてだろ裏返っちゃった、はは」

互いにははと笑う、ほほえましい光景なのだが…その2人の後ろから嫉妬のオーラが

見えているのが絵として惜しい所だったりする。

「おい希？何してるの〜？」

そのオーラを察知した香織は妹のところへ笑いをこらえつつ近寄る。

「監視ー」

そう言つと香織はますます笑いをこらえようとがんばった。

「監視つてちよつと健ちゃんにまずくない？」

「ばれなきゃ大丈夫」

「ったく、そんな事しなくてもお家に帰ればあーんな事やこーんな事まで希のやりたい放題なのにな」

「やりたい放題？…例えば？」

そう言つと香織が耳元でひそひそと何かを伝える

「がんばってみる」

希は家に帰れば作戦を実行する事にした。

「ねえ香苗さん、もし日曜日暇だったらさ俺と一緒にライブ行かない？」

これこそが香織が健一に伝えた作戦だった

「うーん…日曜なのが惜しいかも、土曜だったら空いてるんだけどね」

「そうなんだ…ちょっと残念かも」

チケットが余ってしまった…そして何より一緒にライブへ行けなくなっただけだ。

「え？どうして？」

もちろん一緒に行きたかったからだ、でもそんなこと恥ずかしくて言えなかった。

「あついやほら一日だけずれてて惜しいなーって」

「へへっそうだね」

本当はそうじゃない、別にライブなんかどうでも良いんだ

何より…あの2人のどっちかと行かなくちゃ行けなくなったのが問題に浮上したんだ…！

どうする…？希と行くか？それともいつもお世話になっている香織と行くのか？

香織と一緒に行けば希が暇になる、逆も同じ…いや香織なら1日くらい何とかなるんじゃない

学校が終わり、部活に所属していない3人はさっさと家へと帰る
玄関の前に立ち健一が鍵を開ける

「早く早くー」

「急かすなこら」

「健一早くして」

「希も乗っかるな」

2人に急かされながら鍵を開け中へと入る健一
3人はとりあえずソファーへと腰を掛ける。

「疲れたねー、健ちゃんも早く空けないからいけないんだよ」

「なんでおれのせいなんだ」

「じゃ夕食作ってくる」

「希ー失敗しないようにねー」

「大丈夫」

希は失敗しなかった、無事夕食をとり終えた3人は雑談モードに入った。

「はあー疲れたねーそれより健ちゃん上手く行ったの？」

希の体がぴくつと反応する

「いいやーダメだった」

希がにやける、嬉しくてたまらないのだ

「じゃあさ健ちゃん、余ったチケットで希とライブへ行きなよ」

「希と？」

そう言いながら希のほうへ目を向ける、するといつの間にか健一の手すぐ隣に移動していた

希はうんうんと首を縦に振っていた

「香織はどうするんだよ」

「あたしはいいよーそれよりいつも暇してる希と行きなつて」

「行こうよー」

希が甘え始めた。

「おっけー分かった、じゃ希と行って来るわ」

「やったー香織ありがと」

「ん？何のことかな？」

本当だったなら希が自分で健一作戦上手く行った？や、じゃあ一緒に行く？

と言わないといけなかったのだが香織が代わりに言ってくれたのだ。

それに対してのありがとうという訳だ。

「じゃあ今日は健一と寝る〜」

「え、何で？」

「え〜ダメ？」

「いつも通り自分の部屋で寝ろって」

そうは言うが健一も健全な男の子、頭の中では『バッチコーイ!』
と思っっている

「いいじゃん健ちゃん希と一緒に寝てあげなよ」

これは単なる希のアピールである、それに気づいた香織がすかさず
フオーする

「まあ俺は別に良いんだけど？」

「実は希と一緒に寝てくれることに対してドキドキしてるんじゃないの〜？」

「ホント!? 健一!」

「バツ、バーカ! 香織! そんなことないぜ? 俺はな女の子の一人や
二人隣で寝てたって

別にそんなドキドキなんてしねえよ!」

「じゃああたしもそっちで寝ようかな〜？」

「いいいいぜー? 別に俺は平気なんだから」

なんかドキドキしてきた

「でもあたしは遠慮するわーじゃそういう訳でうちの妹に何かした
ら容赦しないからね」

「なっ何もしねえって!」

「たたく何言っただよ香織の奴」

「健一なら希は何をされたって良い」

「何本気になっただ? 希、そしてその『おいで』と言わんばかり
の両手は何だ?」

「おいでー」

「ああもう！香織！お前のせいでってもういねえ！」

こうして一日が終わった

1話（後書き）

応援よろしくお願いします

もう一つの『俺と彼女と妹と。』もよろしくおねがいします

感想気軽に書いてください、お気に入りに入れてくださると嬉しいです

ではこの辺で

2話

さあ今日は希とライブへ行く日だ、希はすごく機嫌が良い
もうさつきから俺の部屋で何を着ようかーこれじゃないこれじゃないと

着たり脱いだりしている、こっちの身にもなりやがれーってんだ
でもまあ女子だから仕方ねえのかな？

それにしてもなんで俺の部屋で着替えてるんだか
そしてここ一週間であーんで俺の部屋が俺と希の部屋になったんだか
香織の奴、『健一と希の部屋』なんてプレート作りやがって
ああーもうどうしてこうなったんだか

それはそうと今日は希とライブへ行くことになっている

「希　？準備おっけー？？」

着替えが終わったか確認してみる

「急かさないでよ健一」

「まだなのか？」

「うっん、もう大丈夫」

どうやら終わったらしい、じゃ行くとするか

「じゃ希　行こうぜ」

「行こうぜ」

部屋を出ると香織がテレビを見ていた

こっちを見るや否や何か言いたげな表情を浮かべた

「な、なんだよ」

「いやあー、お二人さんがお似合いに見えてねー」

「やだあ照れちゃうよお姉ちゃん」

香織は一体何がしたいんだ？

「じゃお姉ちゃん健と一緒に『デート』に行つて来ます！」

ん？なんか強調した？デートのところ

「おう行つて来いでー『デート！』」

やっぱりだ、しかも香織も…この2人、デートという言葉がそんなに好きなのか？ああん？

「じゃ香織、行つてくるわ」

「行つてくるわ」

「お留守番なら任せておけ！誰が来てもお前らの聖域^{へや}には入れさせん！」

せ、聖域？……な、なんか間違いじゃ…

「お…おう、とりあえず任せた」

「早く行こー旦那さん」

「はいはい、さっさと行こうねー奥さんっておい」

俺と希が組むと大体そこで夫婦ネタが入ってくる、もちろん俺達はそんな仲ではない。

香織のせいで少し足止めされたけどライブの時間には余裕で間に合うからいいや

なーんてことを思いつつ俺は家を出た。

やっぱり日曜という休日のせいか人が多かった。

信号に差し掛かると決まって軽く20人は集まった。

「普段外出ないから分からなかったけど…こんなに人が多いとは」

気のせいかな男たちの視線が希に集中している気がする…気のせいかな

「そうだねー人が多いねーはぐれたら大変だねー」

「うーん、大丈夫でしょ？」

「なんで？」

「だって希、俺の腕をしっかりと掴んでるし…離す気ないでしょ？」

「もちろん！」

笑顔で言うな笑顔で…あーもう、ほらあいつから『何見せ付けてくれてんだよ…』

とでも言いたげなオーラが……って気のせいかな

そういえばさっき掴むと言ったけどこれは掴む、というより両腕を交差させている時点ですがみ付いていると言うのが正解かも…そのせいで俺は少し歩きづらい…あぁーなんか疲れてきたぁートイレ行きてー

「希 ちよつとトイレ行つてきて良いか？」

「え？トイレ？…ダメー」

ダメって…おいおい

「希にそういう事を言う権利はないぞー、というわけでトイレへ行つてくるちよつとそこで待ってて」

そう言つと希は腕のロックを解除してくれた。

「こんな可愛い子あんまり待たせちゃダメだよ？」

「分かつてる分かつてる、早く戻ってくるよ」

そう言つて俺はトイレへ行つた。

トイレにはタバコの匂いが充満していた。

「わータバコくさー…」

中には3人の中年男性がいた…ん？こいつらもしかして…

「いやぁ佐藤氏、今日はとても良い日でござる」

「ござる？忍者？ジャパニーズ忍者？」

「ああ確かに！まさか拙者1／8スケールフィギュアが買えるとは思わなかったでござる」

拙者？…俺の記憶が正しければコイツら…

「2人は良いよ…俺なんて…今日女の子に声かけただけで『うわぁオタクだキモー』とか言われたんだぜ？」

！！オタク！！…そう！オタク！関わりたくないわー

「藤原殿、ドンマイでござるよ、あと話がずれているでござる」

「え？ああごめん」

「それよりも次は何処を回るのだ？」

「ああーそうだなー…とりあえずメイド喫茶にでもよろうと思っ
ているんだけど」

「おっけーでござる！拙者こう見えてもジャンケンとか強いでござ
るよ？！」

「ああそうなんだ…」

ふーんジャンケンねえ…ってかメイド喫茶ってジャンケンするこ
ろなの？？

「試しにやってみるでござるか？」

「え？まあいいけど」

『最初はグー…ジャンケンポンッ！』

ブッ！！…あいつ強いとか良いながら負けてるし！！やばい笑いこ
らえるのが精一杯なんですけどー

って何処の女子高校生だよ（笑）

「拙者が負けるなんて…」

そう男が言つと気まずい空気が流れ始めた…それに気づいたリーダ
ー格の若い男は気を利かせ

『たったまたまだよ、もう一回やろうぜ？』ともう一度勝負に出た。
結果を言つと何度かアイコになり結局また勝ってしまい、もうどう

することも出来ない空気を発生させてしまった…くだらねえ、ただのジャンケンに過ぎねえじゃんか、どうしてこんな空気になるんだか…俺には分からない………とりあえずどいてくれない？

不意に思いついた【殺気のオーラ】を出してみる…もちろん効き目は無い

「む？この殺気…まさか…！」

「拙者も感じるでござるよ…！」

…効き目あったみたい

「やばいでござるよ明らかに拙者達より戦闘力は上…！」

「かつくなる上は…！」

ちよつと面白いので今度は意識してオーラを出してみる…

「ふ！2人は終わったでござるか？！」

「せつ拙者は佐藤氏と藤原氏のタイミングを見計らっていたでござるよ？！」

「ああ俺も2人が離れたら離れようと思っていたんだけど…長くなつたな」

二人がオーラ（？）に刺激され、帰ろうよと言わんばかりにセリフを吐いた。

そして3人が退きようやく空気が出来た…

便器は3つしかないわけじゃなかった。

そのトイレには便器が6つ用意されていた。

女子から言わせて見れば3つしか使っていなかったから残りの3つを使えば良いじゃん

意見が出そうなところだが男子のエチケット的な何かに引っかかる

から俺は使わなかった。

「まったく何でさっさとどいてくれなかったんだ、しかも2回も便器の水洗が起動してたし」

愚痴りながら小便を終え、手を洗い、髪形をチェックした。
ふいに事件が起きた、それは突然の事だった

「嫌です！離してください希には待っている人が居るんです！」

2 話（後書き）

応援みたいな感想待ってます

お気に入り登録してくださいとやる気が出ます
ではこのへんで

3話（前書き）

暇つぶしにでもなれば幸いです。

3話

「嫌です！離してください希には待っている人が居るんです！」

希の悲鳴にも近い声が外から聞こえた…！

「希！」

俺は急いで外へと飛び出した
そこで俺が見たのは

「君、今から俺らと一緒にお茶しない？」

「藤原氏がナンパに出たでござる！」

「頑張れ藤原氏！」

あいつら…何度も俺を困らせるんじゃないやねえよ…！

「だから希には待っている人が…！」

必死に希は誘いを断っていた。

「えー？その割には誰も来ないじゃん」

「だからいるんですってば！待ってる人が！」

見てられなくなってきた。さっさと助けてやろう

一つため息をつき、希の下へ走る

「希！」

希は俺の声にすぐ反応した

「健一！遅いよ」

いつものちよつぱりほんわかした雰囲気の希に戻っていた。
そして俺はすぐに希の手を取った。

「じゃ行くぞ」

そう言ふと希はうん！と頷いた。

そしてそのまま走り出そうとしたのだが

「ちよつと待てよ、誰だよお前？」

俺はその藤原とか言う奴に腕を掴まれてしまった

「ああ！？お前こそ誰だよ！」

「お前なあ、人の恋路を邪魔して良いと思」

藤原とか言う奴が何かを言いかけたときだった、次の瞬間

「どっちが邪魔しとんじゃゴルアアア！！！」

その藤原が吹っ飛んで行った

ふっ飛ばした犯人は…希だ。

希はキレた、ああゝあゝ【助けてやろうと思ったのに】

そして希は藤原とか言う奴の前に立った

「人の恋路邪魔してんのにそんなこと言えるのかよ？」

「え？あ、あの、えつと…」

「あと、あたしの健一に触らないでくれる？」

藤原を含めた3人の男達はじりじりと後ずさりを始めた。

希は俺にアイマスクを渡した

『健一それつけて』瞬間的に希がいつも通りに戻る。

『はいはい』と、俺はアイマスクを受け取りそれを装着する。

何も見えないが音だけは聞こえた。

「あたしの恋路を邪魔するなあああ！！！！」

「うつわああああ！！」

「そおおりゃああああ！！」

「痛てえええ！！！！」

そんな声が俺の耳に届いた。

ドガッ！バコッ！！バキン！！

頼むから店のものとか壊さないでくれよ希？

事態は収束した。

「次、こんなことしたら…：どうなるか分かるよね？」

やっぱ女って怖ええ…

「すっスイマセンでした！」

「健一、取ってもいいよーでも後ろは見ないでね？」

「あ、ああ…」

俺はアイマスクを外し、前へ歩き出した…

後ろから男のうめき声がした、気にしないことにした。

ちなみに『救急車…』と言った次に

『うわぁキモー！関わらない方が良くいよー』と聞こえたような気がした。

もちろん気にしないことにした。

それから希はえへへーとか言いながらまた俺の腕にしがみ付いてきた。

…気にしないことにした。

2人で数分歩いた所でようやく会場に着いた。

『お二人様ですか？』

「はい、そうです」

俺と希（香苗さん用）のチケットを渡し、中へと入った。

3 話（後書き）

感想待ってます！ホントに感想待ってます！

コメントみたいな感じで結構なんで書いてくださると大変ありがたいです。

それでは失礼します。

4 話（前書き）

感想など送ってもらえると助かります。 お願いします。

4話

うわぁーライブってすごいな、俺は第一にそう思った。

次に警備員の人々がメガホンを取り出した。

『皆さん！他の人を押したり殴ったりしないでくださいね！ケガ人が出るかと私達の仕事が増えますから！』

次の瞬間そこにいたお客たちは大笑いした。

「ただ単にサボりたいだけじゃ…あははっ面白いな！」

「健一、楽しいのはこれからだよ？」

身長差や段差の関係もあり、希は上目遣いになってそう言った。

「そっか、ははっ楽しいのはこれからか、あははっ」

やべえここの雰囲気すごく心地が良い、常に笑って居なくなるくらいだ。

それから何分か待った頃、マイクのキーーンという音が会場全体に響き渡った

その場に居た全員が『来た！』と感じた

その予感は的中した

「みんなー！おまたせっ！それじゃ早速始めんぞー！！」

舞台の横から1人の女性が現れその後ろから3人の女性がそれぞれの位置に駆け寄っていった。

「まずは…これだっ！！」

皆はその曲が分かるんだろうな、周りから『おお！』という声が聞こえてきた。

俺は何にも分かんねえからただ単にそのライブを楽しむことにした。ふと隣を見ると希がこちらをずっと見ていることに気づいた

「健一、楽しい？」

「ああ楽しいよ、あははっやばい帰りたくなくなるかも」

「それじゃあたしとこのままどっか行っちゃう？」

「それは…パスだなーははっ」

「」

その時確かに希が何かを言っていた…でもその声は周りの声援に掻き消された。

もちろん俺はその時何を言ったのかは知らない。

それからというものの、俺と希は始めてライブというのを楽しんだ。

「へえあのアーティストって結構有名なアーティストだったんだ」

「うん、あたしも始めて聴いたんだけど、結構良かったね」

「おう、確かに良かった、やっぱ最後の曲が一番良かった」

「あたしも！旦那さん気が合うねー！」

「そうだなー気が合うな奥さんーってこら」

玄関に立ち希に急かされつつ俺は鍵を開けた。

「ただい」

「健ちゃんおつかえりー」

香織が出迎えてくれた。

「お出迎えは良いけど…その、何と言うか」

「なあに？」

「分かっててやってるんだろ？」

普通、抱きついてくる奴がいるか？…でも男としてこれは嬉しい…

「まあねーこうしたら顔が赤くなるんじゃないかと思ってねー」

「ば、ばーか、俺がこんなことで赤くなるわけないだろ？」

「どうかなあー？」

「ちょっとお姉ちゃん、健一はあたしのだよ？あんまりいじっちゃダメ」

「俺は誰の物でもねえ、それにいつ希の物になったんだ？」

毎日こんな感じの会話が繰り返されている。

俺は最近うらやましい位置にすることが分かってきた。

「さあ今日はあたしが作ったよー」

一体香織は何を作ったんだろうねー

「ん？何作った？」

手間の掛かるものは作らないはず…

…まあとりあえずテーブルに着いた。

「お姉ちゃん料理のレパートリーが狭いからね」

「まあそう言わずに、元はと言えば俺が料理できないからなんだし？」

「健一が料理できないのは問題ない、だって奥さんであるあたしの仕事なんだから」

「はいはいそうですね奥さんよ」

とか何とか話していると香織がお盆を両手に持ってきた

「はいお鍋作ったよ！」

「わーすごいーよく頑張ったねー」（棒読み）

俺と希は声を揃え、棒読みなところまで揃えてそう言ってやった。

「…なにさーその『ああやっぱり簡単な物しか出ないよね』って目は」

「ピンポンピンポン！正解です」

「正解です」

「やった正解だーってこらー！なんか悔しいぞ?！」

「じゃあ…今回の【料理】の手順を言ってもらおうか?」

「言ってもらおうか」

「え、えっと…まず材料を全て揃えて」

「はいはい」

「それから鍋に水と醤油と後いろんな物を注ぎます」

「んで?」

「それから材料を全て鍋に放り込みます」

「それで?」

「え?」

俺がバカだからその先を聞いたんじゃないぞ?あえてその先を聞いてみたんだ

「だから、放り込んだ後は?」

「い、いや…終わり…」

「へえー簡単だ」

「簡単だ」

「わっ悪かったな…簡単だよ」

少し香織が拗ねた、でもこれが普通なんだなー

「でもさ、そんなに簡単なら俺にも作り方教えろよ」

「…いいけど…?」

「ってかさー顔赤くない?暑いからか?」

「まっ!まあな!そっそんな事より早く食べよう!」

妹は見逃さなかった

姉の赤くなった顔を

4 話（後書き）

お気に入りに入れてくだされば嬉しいです

『俺と彼女と妹と。』こちらの感想も待ってます

P S . 評価をつけてくださった方へ感謝をここへ記します。

5 話（前書き）

感想待ってます

5話

「起きて健一……」

「ん……？」

もう朝か……学校だるいな……って起こしてもらったのが日課になり始
めてる……

「夜だけど」

「え……？」

突然俺は希に起こされた。

用件はこうだ『そこに何か黒いものがある』

俺はそれを調べるために起こされた。

「無視すればいいんじゃない？」

「ダメ、この神聖なる部屋をあたしたち以外のものが汚してはいけ
ない」

「……そうですか」

俺は腕に希を装備(?)し、その黒き物体に近づいた。

「ちゃん」

「……………」

「何だ、何にもおきない……って事はこれは生き物じゃなくて俺たち

のどつちかの服か何かだな」

「安心したあー」

「……………んっ」

「……………え？」

声がした…俺と希は顔を合わせ驚いた

「…希…」

「何？惚れちゃった？」

「冗談を言う場面じゃないって！」

明らかに声がした。

誰だ…こいつはいつたい誰なんだ

「健一、電気点けるね」

「お、おう…ちよっと離れよう」

俺はそれから距離を置き、希は明かりを点けようと移動した。

「はい点けた！」

「おう点いた！」

俺と希はまた驚いた。

「……………健一、この女誰？」

「のっ希？！おいっ！俺も誰だか知らないって…！！」

「ホント？」

「ああホントさ…ってかマジでこの人どうするよ」

すると希が近寄り、おーいと一声掛けた

「…健一、この子…女の子」

「ええ!？」

俺からは希が邪魔でよく見えない。
女の子?どうして女の子が?…

「……健一!!」

「なっなんだ希ッ!!?」

「この子…あたしより胸が大きい…!!」

「それよりもっと大きな問題があるだろ目の前に…!!」

「…健一!!」

「今度は何だ?!」

「この子封筒持ってる」

本当に封筒を持っていた。

希はそれを開封し、読み上げた

『よお健一、俺だ父さんだ』

「え!親父?!」

『実はな、父さん、お前が産まれる前に1人子供が居たんだ』
「隠し子!？」

『でな、今父さん倒産しそうなんだ(笑)』

「寒ッ!!…ついでに懷も寒かったりして…!!」

俺上手いこと言った！…ってそんな場合じゃ

『だからそいつの面倒見てやってくれ』

「…ちょ…いきなりすぎるわ…」

この家にまた女子が増えるのかよ…しかもなんだ？この子は俺にと
って腹違いの姉ってことか？！

そんな頭を抱える俺にとどめのメッセージが

『P.S. 仕送り止ったらごめんちゃい><！』

「ふざけんなあ！！！」

思いつきり叫んでしまった。恥ずかしいくらいに叫んでしまった。

手紙を読み終えた希は時刻を忘れ香織を呼び起こしに行った。

「お姉ちゃん！大変！ライバルが…！！！」

それから何があつたかはあまり覚えていない。
いきなりすぎて俺の頭がパンクしたんだ多分。

それでも1つだけ分かったことがある、それは

「健一さん、起きてください」

俺はそう起こされた…一応言っけ置く、目覚ましはちゃんとセット
してある。

それより早く起こされるんだ。起きれないのではない！

「え？…あつ！え！あつ…あはようございます！」

わけが分からなくなり挨拶をしてしまった。

「ええおはようございます健一さん」

昨日は足を曲げて丸くなっていたから分からなかったけど、この人俺より背が高い

…あ胸大きい、希はこのことを言っていたのか…って俺は何を考えてるんだ

「あのっ…勝手に手紙を読んだんですけど」

「ああ、そうだったんですかそれで無かったんですね」

「ああすいません」

「申し遅れました私、真奈^{まな}と申します」

ひとつだけ分かったこと…この子は居候ではない。家族だということだ。

よって嬉しいことに家族が増えた事になる。

ちなみに…もし真奈さんがブスだった場合…悲しい出来事となっていたらう

5 話（後書き）

短くてすいません…テスト期間中だったもので…

【俺と彼女と妹と。】こちらもよければ読んでやってください
ではこの辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549/>

恋する少年と2人の居候。

2010年10月11日14時50分発行